

中国



1 農・畜産業の概況

中国の国内総生産（GDP）に占める農林水産業の割合は、8.9%（2016年）であり、低下傾向で推移しているものの、世界のGDP上位10カ国の中でインドに次いで高い水準である。また、就業人口に占める1次産業従事者の割合は27.7%（2016年）と高い（表1）。

中国の農林水産業の総生産額は、増加傾向で推移しており、2016年は、前年比4.5%増の10兆6479億元となった（表2）。部門別の割合の推移を見ると、1980年に8割弱を占めた農業（耕種）は5割強まで減少した一方で、畜産業は1980年の2割弱から3割弱にまで増加している。

表1 農林水産業の地位

（単位：億元、万人）

区分／年	1980	1990	2000	2015	2016	前年比 (増減率)
GDP	4,588	18,873	100,280	689,052	743,586	7.9%
農林水産業	1,372	5,062	14,944	62,912	65,976	4.9%
割合(%)	29.9	26.8	14.9	9.1	8.9	▲0.2ポイント
就業人口	42,361	64,749	72,085	77,451	77,603	0.2%
第1次産業	29,122	38,914	22,790	21,919	21,496	▲1.9%
割合(%)	68.7	60.1	31.6	28.3	27.7	▲0.6ポイント

資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

表2 農林水産業総生産額の推移

（単位：億元）

区分／年	1980	1990	2000	2015	2016	前年比 (増減率)
農林水産業	1,923	7,662	24,916	101,894	106,479	4.5%
農業(耕種)	1,454	4,954	13,874	54,205	55,660	2.7%
割合(%)	75.6	64.7	55.7	53.2	52.3	▲0.9ポイント
畜産業	354	1,967	7,393	28,649	30,461	6.3%
割合(%)	18.4	25.7	29.7	28.1	28.6	0.5ポイント
林業	81	330	937	4,358	4,636	6.4%
割合(%)	4.2	4.3	3.8	4.3	4.4	-
水産業	33	411	2,713	10,339	10,893	5.4%
割合(%)	1.7	5.4	10.9	10.1	10.2	0.2ポイント
その他	0	0	0	4,341	4,829	11.2%
割合(%)	0.0	0.0	0.0	4.3	4.5	0.3ポイント

資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

注：総生産額は名目値

近年の畜産物の家庭での1人当たり年間消費量を見ると、豚肉を除くすべての品目で農村部の消費量が都市部の消費量を大きく下回っている（表3）。豚肉は、中国における伝統的な食材であるため、都市部と農村部の消費量にあまり差がないと考えられる。都市部と農村部ともに牛肉と家きん肉の消費量が増えている。

表3 畜産物の家庭での1人当たり年間消費量

（単位：kg/人）

区分／年	2014	2015	2016	前年比 (増減率)	
都市部	牛乳乳製品	18.1	17.1	16.5	▲3.5%
	牛肉	2.2	2.4	2.5	4.2%
	豚肉	20.8	20.7	20.4	▲1.4%
	家きん肉	9.1	9.4	10.2	8.5%
農村部	牛乳乳製品	6.4	6.3	6.6	4.8%
	牛肉	0.8	0.8	0.9	12.5%
	豚肉	19.2	19.5	18.7	▲4.1%
	家きん肉	6.7	7.1	7.9	11.3%

資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

注：家庭での消費量であり、外食や加工品による消費は含まれない。

2 畜産の動向

(1) 養豚・豚肉産業

豚肉は伝統料理で多く使われる重要な食肉であり、中国の食肉生産量の約3分の2を占めている。米国農務省によると、2016年の中国の豚肉生産量と消費量は、それぞれ世界の約半分を占めており、ともに第2位のEUを大きく上回っている。

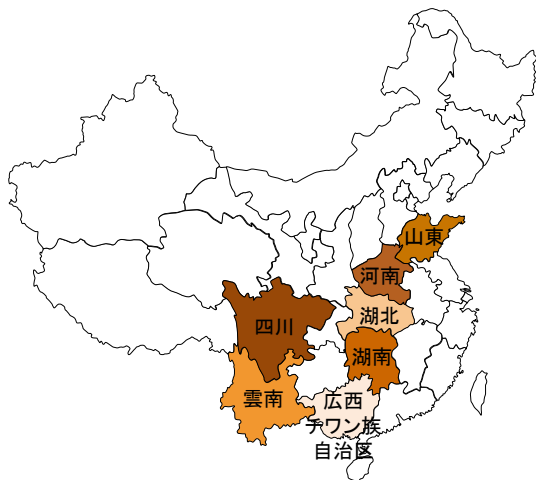
① 養豚の飼養動向

地域別に飼養頭数を見ると、山東省以南に多く、また、上位7省（自治区）で全体の5割以上を占めるなど、地域的に偏りが見られる（図1、2）。

農家の規模は、零細が極めて多く、年間出荷頭数が49頭以下の農場が全体の94.4%を占めている（表4）。

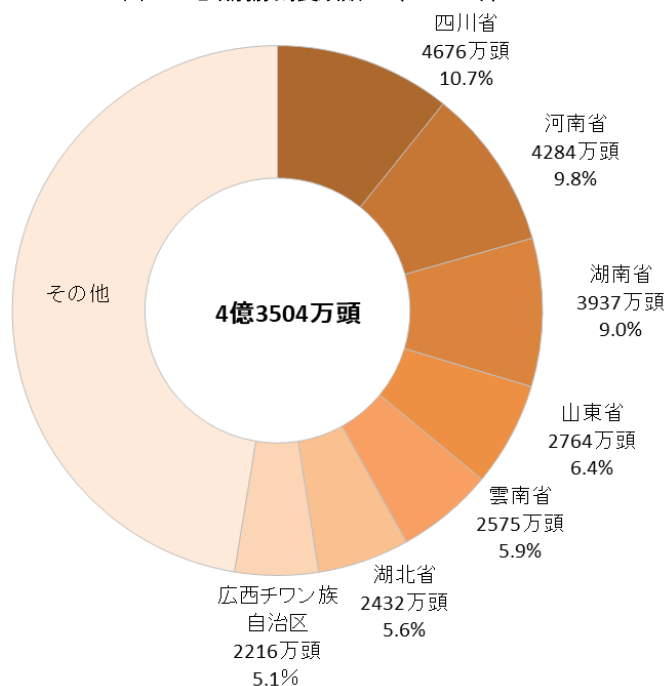
飼養頭数は2012年以降、減少傾向で推移しており、2016年には4億4209万頭とされている。

図1 地域別豚飼養頭数上位7省・自治区



資料：中国農業農村部 「中国農業年鑑」

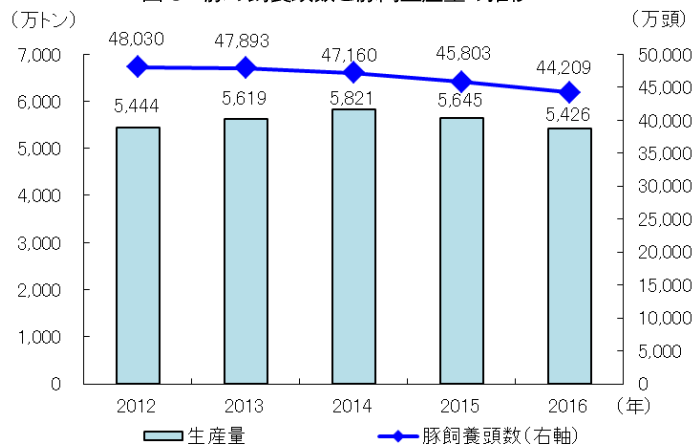
図2 地域別豚飼養頭数 (2016年)



資料：中国農業農村部 「中国農業年鑑」

注：データは2018年9月に修正される以前のもので、図3と一致しない。

図3 豚の飼養頭数と豚肉生産量の推移



資料：中国国家统计局 「中国統計年鑑」

表4 豚の出荷規模別の農場戸数 (2016年)

(単位：万戸)

区分／規模	全体	1～49頭	50～99頭	100～499頭	500～999頭	1,000～2,999頭	3,000～4,999頭	5,000～9,999頭	10,000～49,999頭	50,000頭以上
戸数	4,261	4,021	143	71.9	16.7	6.4	1.33	0.71	0.43	0.03
割合	100.0%	94.4%	3.4%	1.7%	0.4%	0.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

資料：中国農業部 「中国畜牧獣医年鑑」

② 豚肉の需給動向

豚肉の生産量は、2014年をピークに減少傾向で推移している。減少の要因としては、2014年から2015年前半にかけて生体出荷価格が低迷したことや、環境規制による立ち退き（「④その他」参照）で多くの零細農家が養豚経営をやめたことが挙げられる。また、2016年の年明けに子豚の下痢が流行したことも影響していると考えられる。

消費量は、人口増加や所得向上を背景に増加傾向で推移してきたが、2015年以降は減少している。これは、中国共産党の「中央八項規定」（いわゆる「俸約令」）が厳格に適用されたことで接待需要などが減少したことが影響したものと思われる（表5）。

輸入量は、2015年、2016年に国内生産量が減少して国内価格が上昇したことで急増し、2016年には過去最高の218万トンとなった。

表5 豚肉需給の推移

（単位：万トン）

区分／年	2012	2013	2014	2015	2016
生産量	5,444	5,619	5,821	5,645	5,426
輸入量	73	77	76	103	218
輸出量	24	24	28	23	19
消費量	5,493	5,672	5,869	5,725	5,625

資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」（生産量）、
USDA/FAS「FAS Online」（輸出入量）
注：枝肉重量ベース。



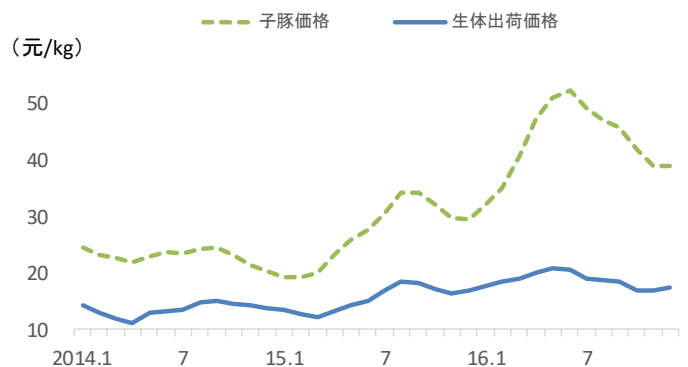
写真1 済南市内の市場での豚肉販売風景

③ 豚肉の価格動向

生体出荷価格は、2014年から15年前半まで低水準で推移し、多くの生産者が養豚から撤退したため、その後急上昇し、2016年に過去最高水準に達した。

子豚価格は、生体出荷価格および小売価格と同様の傾向だが、価格の振れ幅が大きいことが特徴である。これは、膨大な数の零細農家が急激に飼養頭数を増減することが一因と言われている（図4）。また、2016年の年明けに子豚の下痢が流行したことも価格上昇を後押ししていると考えられる。

図4 子豚価格、生体出荷価格の推移



資料：子豚価格は中国農業農村部、生体豚出荷価格は中国国家発展改革委員会



写真2 北京市内のスーパーでの豚肉販売風景

④ その他

近年、「中華人民共和国環境保護法」などの法令によって、ばい煙や廃水を排出する工場などが厳しく取り

締まられている。畜産農家も主に廃水を出すことを理由に取締り対象となっており、2014年1月に発効した「大規模家畜家きん飼育場における汚染防止条例」によって、地方政府は、家畜・家きんの飼養を禁止す

る「飼養禁止区域」を設定することとされた。同区域内の畜産農家はすべて立ち退かなくてはならず、立ち退きの期限は、北京、天津、揚子江デルタ、珠江デルタは2016年内、その他の地域は2017年内とされている。しかしながら、現地専門家の話では、2017年末の時点で立ち退きは終わっておらず、すべてが終わるまでに数年程度かかると見られている。環境規制の詳細については、機構が発行する『畜産の情報』2018年4月号のP95を参照されたい。

また、2018年8月に中国ではじめてアフリカ豚コレラの発生が確認されて、その後、12月2日までに21省・自治区で59例の発生が確認されている。自身の農場でアフリカ豚コレラが発生した場合の被害を減らすために子豚の導入を控える生産者が多いと言われ、今後豚肉供給量が減ることが懸念される。

(2) 酪農・乳業

中国の牛乳・乳製品の消費は、人口増大や所得向上、健康志向の高まりなどを背景に増加傾向にある。また、2008年に発覚したメラミン混入事件などにより、育児用粉乳を中心に消費者が輸入品を好むことが特徴的である。

国際酪農連盟のデータによると、2016年の中国の生乳生産量（水牛を除く）は、米国、インドに次ぐ世界第3位であり、全世界の5.3%を占める。

① 乳用牛および生乳の生産動向

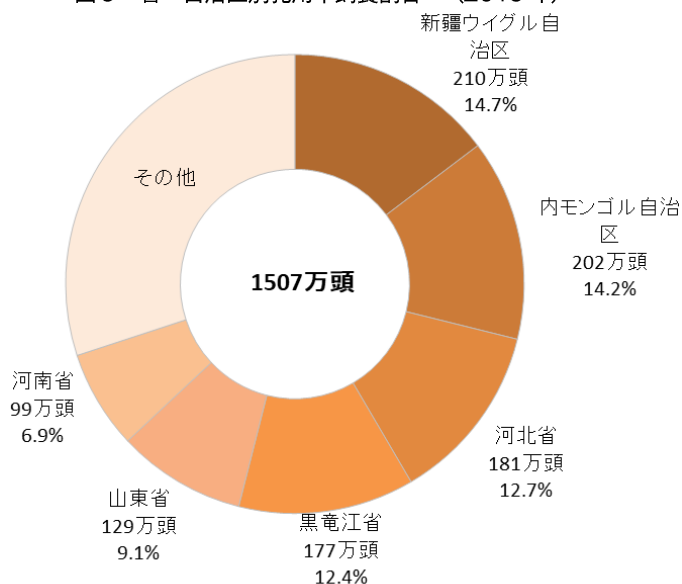
地域別に飼養頭数を見ると、河南省以北で多く、上位6省・自治区で全体の7割の頭数を占めている（図5、6）。また、飼養規模別の農場戸数を見ると、飼養頭数9頭以下の農場が全体の91%を占めている（表6）。飼養頭数は2008年ごろまで急速に増加したが、それ以降は微増傾向で推移し、2016年は、前年比0.5%増の1507万頭だった（図7）。

図5 乳牛飼養頭数上位6省・自治区



資料：中国農業農村部 「中国農業年鑑」

図6 省・自治区別乳用牛飼養割合（2016年）



資料：中国農業農村部 「中国農業年鑑」

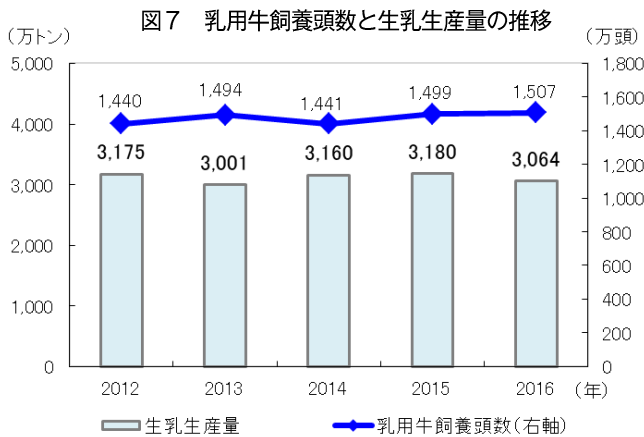
注：2018年9月に修正される以前のもの。

表6 乳用牛の飼養規模別農場戸数（2016年）

（単位：万戸）

区分／規模	全体	1～4頭	5～9頭	10～19頭	20～49頭	50～99頭	100～199頭	200～499頭	500～999頭	1,000頭以上
戸数	130.2	102.4	16.0	6.4	3.1	1.1	0.5	0.3	0.2	0.1
割合	100.0%	78.7%	12.3%	4.9%	2.4%	0.9%	0.4%	0.3%	0.1%	0.1%

資料：中国農業農村部「中国畜牧兽医年鑑」



資料：中国国家統計局「中国統計年鑑」、中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」
注：飼養頭数は2018年9月に修正された以前のもの

② 牛乳・乳製品の需給動向

国内の乳業メーカー各社は、2008年に発覚したメラミン混入事件以降、特に育児用粉乳や高級ヨーグルト製品の原料として、国産品を敬遠し輸入品の使用を増やしてきた（表7）。輸入量は、今後も消費者の輸入ブランドへの信頼性の高さなどによって増加基調で推移すると考えられる。

表7 乳製品輸入量の推移 (単位：万トン)

区分/年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年
全粉乳	41	62	67	35	42
ホエイ	38	43	40	44	50
飲用乳	9	19	32	46	63
脱脂粉乳	17	24	25	20	18
育粉	9	12	12	18	23
クリーム	1.3	2.2	3.3	5.8	8.5
チーズ	3.9	4.7	6.6	7.6	9.7
バター	2.4	3.3	5.1	5.4	6.3
ヨーグルト	0.7	1.0	0.9	1.0	2.1

資料：USDA/FAS「PSD Online」、Global Trade Atlas
注1：全粉乳、脱脂粉乳、飲用乳はUSDAより。
2：HSコードは、ホエイは040410、育粉は190110、クリームは040150、
チーズは0406、バターは040510、ヨーグルトは040310。

乳製品のうち全粉乳（育児用粉乳、還元乳やヨーグルト、アイスクリーム、焼き菓子などの原料として使われる）の需給を見ると、2016年の消費量は、前年比4.2%増の199万トンとなった。一方、2013年から2014年にかけての大量輸入で在庫が積み上がっていたため、2016年の輸入量は42万トンであった（表8）。主な輸入相手国はニュージーランドであり、同国はFTAによる関税削減の恩恵を受けて（※）9割のシェアを占めている。

※ 枠内税率は2.5%（2016年）。最惠国税率は10%。

詳細は「畜産の情報」（2016年9月号）のP.95を参照。

表8 全粉乳需給の推移

(単位：万トン)

区分/年	2012	2013	2014	2015	2016
生産量	116	120	135	162	138
輸入量	41	62	67	35	42
輸出量	0.9	0.3	0.6	0.4	0.3
消費量	155	175	185	191	199

資料：USDA/FAS「PSD Online」

脱脂粉乳は、全粉乳に比べて消費量が少なく近年は横ばいで推移している（表9）。また、国内生産よりも輸入量が多いことが特徴的である。

表9 脱脂粉乳需給の推移

(単位：万トン)

区分/年	2012	2013	2014	2015	2016
生産量	5.7	5.4	4.9	4.5	4.0
輸入量	16.8	23.5	25.3	20.0	18.4
輸出量	0.0	0.0	0.2	0.1	0.1
消費量	22.5	28.9	30.0	24.4	22.3

資料：USDA/FAS「PSD Online」

中国では、飲用乳の消費量は、2015年まで増加していたが、2016年は約3%減少した（表10）。ロングライフ（LL）牛乳が広く普及しているため、ドイツなど遠方の国からも輸入されている。

表10 飲用乳需給の推移

(単位：万トン)

区分/年	2012	2013	2014	2015	2016
生産量	3,396	3,575	3,880	3,905	3,762
輸入量	9	19	32	46	63
輸出量	3	3	3	3	2
消費量	3,403	3,591	3,909	3,949	3,823

資料：USDA/FAS「PSD Online」

ユーロモニターインターナショナル社によると、小売販売数量は、フレーバーミルクが減少傾向であるのに対し、牛乳とヨーグルト、チーズは増加しており、特に、ヨーグルトとチーズは過去5年間で倍増している（表11）。

牛乳については、販売量の8割弱をロングライフ（LL）牛乳が占めているが、フレッシュミルク（要冷蔵の牛乳）の割合が増加傾向にある。加えて、ロングライフ牛乳の中でも比較的賞味期限の短い製品の販売量が増えていると言われる。

フレーバーミルクについては、2014年以降急速に販売量が減少しており、消費者の健康志向が影響していると考えられている。

ヨーグルトは、急速に販売量が伸びている。中国では

飲むタイプのヨーグルトが主流で、最近は、特に常温保存できる商品が地方都市や農村部に急速に普及し、ヨーグルト販売の拡大をけん引していると言われている。

チーズについては、プロセスチーズが8割強を占め、外食で提供されるピザやハンバーガーをきっかけに消費が広がっている。ナチュラルチーズの販売は少なく、さらに3割強をクセのないモzzarellaチーズが占めている。

表11 主な牛乳乳製品の小売販売数量の推移
(単位: 万トン)

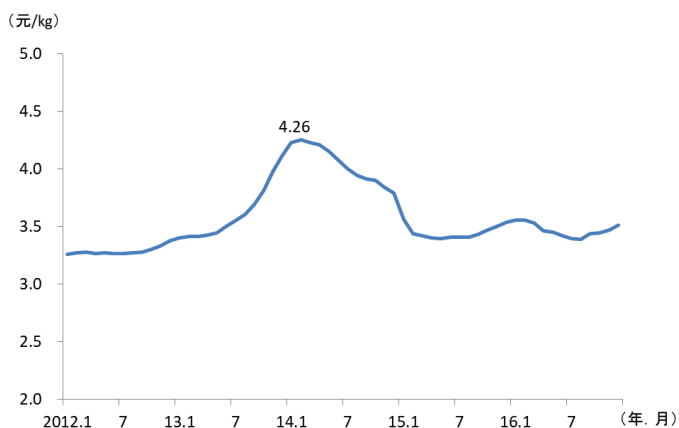
区分/年	2012	2013	2014	2015	2016
牛乳	842	889	937	959	984
うちLL	665	702	741	752	765
うちフレッシュ	178	186	196	207	219
フレーバーミルク	791	856	900	798	688
ヨーグルト	428	484	568	661	764
チーズ	1.5	1.9	2.2	2.7	3.1

資料：ユーロモニターインターナショナル社

③ 生乳価格動向

生乳価格は、2013年夏の記録的な猛暑により生産が減少したため、同年後半から2014年初めにかけて上昇したが、その後下落し、2015年以降は安定して推移している(図8)。

図8 生乳の農場出荷価格の推移



資料：中国農業農村部

注：主要生産省・自治区(河北、山西、内モンゴル、遼寧、黒竜江、山東、河南、陝西、寧夏、新疆)における農場出荷価格の平均。これら10省・自治区で生乳生産の8割を占める。

④ 販売風景

フレッシュミルクの陳列は日本と同様だが、LL牛乳は、写真3のように飲みきりサイズのを10~20個程度(写真は190ml×15個入り)まとめて厚紙で包装し、豪華なプリントを施した製品が多く売られている点特徴的である。同様の包装は、鶏卵でも一般的である。

また、フレッシュミルクや飲むヨーグルトは、写真4のようなビニールパウチに入った製品も多い。



写真3 LL牛乳



写真4 飲むヨーグルト

(3) 肉用牛・牛肉産業

① 飼養動向

中国で肉用牛の生産が始まったのは1990年代と言われており、それまでは牛は役畜として飼われていた。肉用牛として飼われているのは主に、黄牛（在来種）とシンメンタールの交雑種である。

地域別では、内陸部の飼養頭数が多く、上位7省・自治区で全体の5割弱を占めるなど、偏在している点は他の家畜と同様である（図9、10）。農家は零細規模が極めて多く、年間出荷頭数が9頭以下の農場が全体の95%を占めている（表12）。

飼養頭数と牛肉生産量の推移を見ると、ともに増加傾向で推移しており、2016年の飼養頭数は、前年比0.8%増の7441万頭、牛肉生産量は横ばいの617万トンとなった（図11）。米国農務省によると、2016年の中国の牛肉生産量は、米国、ブラジルに次ぐ世界第3位（米国の約6割）であり、全世界の生産量の1割を占めている。

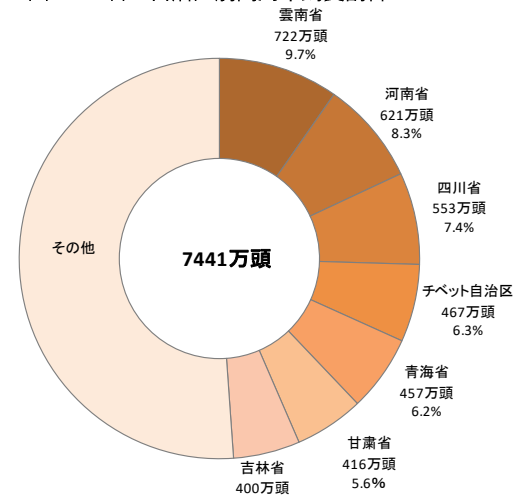
中国の牛肉消費は、イスラム教徒による消費が多いことから、ハラールの商品が多く売られている。

図9 肉用牛飼養頭数上位7省・自治区



資料：中国農業農村部「中国農業年鑑」

図10 省・自治区別肉用牛飼養割合



資料：中国農業農村部「中国農業年鑑」

注：2018年9月に修正される以前のもの。

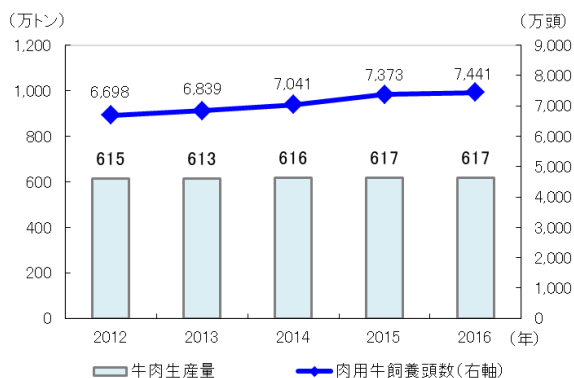
表12 肉用牛の出荷規模別の農場戸数 (2016年)

(単位：万戸)

区分／規模	全体	1～9頭	10～49頭	50～99頭	100～499頭	500～999頭	1,000頭以上
戸数	1,052.7	1,000.6	41.0	8.3	2.4	0.3	0.1
割合	100.0%	95.1%	3.9%	0.8%	0.2%	0.0%	0.0%

資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

図 11 肉用牛飼養頭数と牛肉生産量の推移



資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」、中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」
注：飼養頭数は2018年9月に修正された以前のもの

② 需給動向

牛肉消費量は長期にわたって増加し続けており、2016年は前年比2.2%増の696万トンだった(表13)。一方、国内生産は、横ばいで推移しており、この需給ギャップを埋めるため、輸入量が急速に増えている。主な輸入相手国は豪州(3割強)、ウルグアイ(3割弱)である。

なお、現地専門家の中には、相当量の非正規輸入品が流通しているとの見方があるが、詳細は不明である。

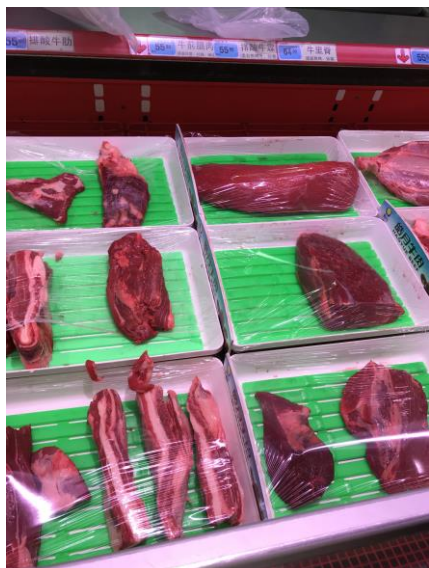


写真5 北京市内のスーパーでの冷蔵牛肉販売風景

表 13 牛肉需給の推移

(単位:万トン)

区分/年	2012	2013	2014	2015	2016
生産量	615	613	616	617	617
輸入量	10	41	42	66	81
輸出量	4	3	3	2	2
消費量	621	651	655	681	696

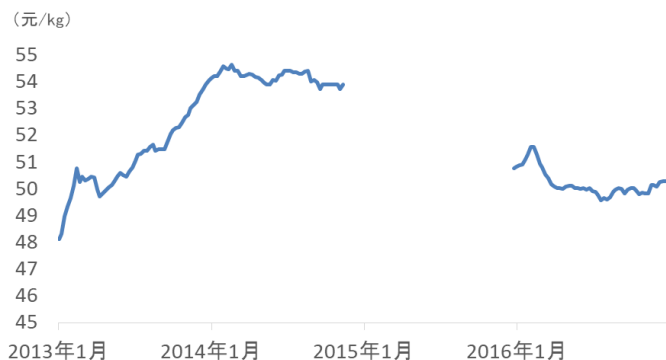
資料：中国国家统计局「中国統計年鑑」(生産量)、
USDA/FAS「PSD Online」(輸出入量)

注：枝肉重量ベース。

③ 価格動向

牛肉の卸売価格は、需要の拡大に伴って2014年に高水準となったが、2015年以降は輸入量の増加に伴って下落している。(図12)。

図 12 牛肉卸売価格の推移



資料：商務部

注：2015年のデータは公表されていない



写真6 北京市内でスーパーでの冷凍牛肉販売風景。火鍋用に薄くスライスされたもの。

(4) 肉用鶏・鶏肉産業

① 飼養動向

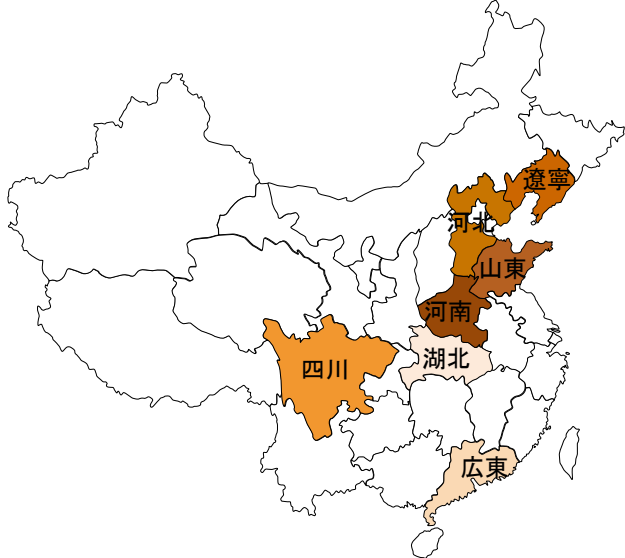
鶏肉は豚肉に次いで多く消費される食肉である。肉用鶏の品種は、約半数が海外品種（白羽肉鶏と呼ばれる）で、残りは在来品種（黄羽肉鶏と呼ばれる）や在来品種と海外品種の交雑種である。

地域別に飼養羽数を見ると、沿岸部で比較的多く、上位7省で全体の6割弱を占めている（図13、14）。1戸当たりの規模は、年間出荷羽数が2000羽に満たない経営が98.2%とかなりの割合を占めている。（表14）。

家きんの飼養羽数は、国内での鳥インフルエンザ発生により2013年に一時的に減少したものの、その後は増加基調で推移している（図15）。

2016年の家きん肉の生産量は、前年比8.2%増の123万トンであった。米国農務省によると、中国の鶏肉生産量はブラジルに次いで世界第2位で、世界の生産量の13.8%を占める。

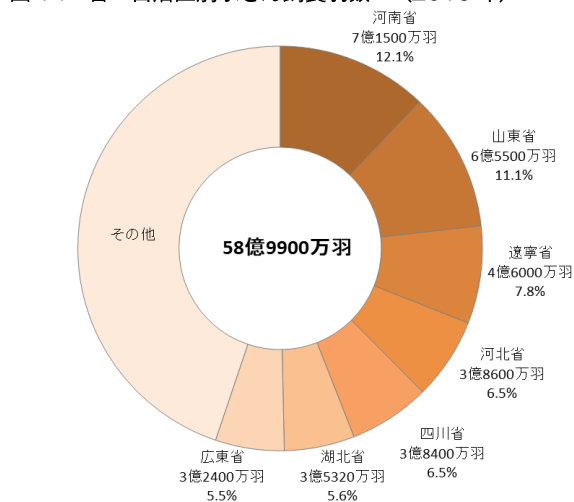
図13 家きん飼養羽数上位7省



資料：中国農業部 「中国農業年鑑」

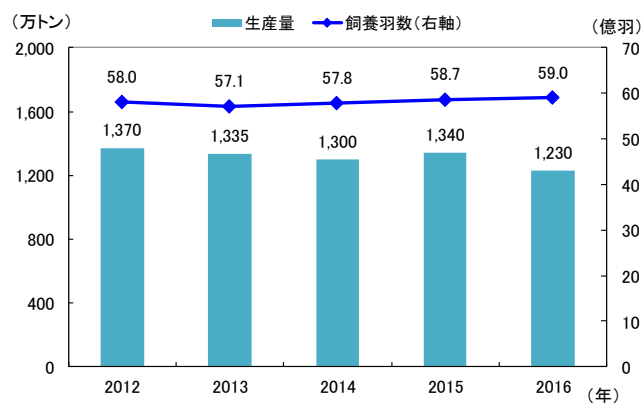
注：「家きん」はブロイラー（肉用鶏）や採卵鶏、アヒルなど。

図14 省・自治区別家きん飼養羽数（2016年）



資料：中国農業農村部 「中国農業年鑑」

図15 家きん飼養羽数と家きん肉生産量の推移



資料：中国農業部 「中国農業年鑑」

表14 家きん（肉用）の出荷規模別の農場戸数

(単位：万戸)

区分／規模	全体	1～1,999羽	2,000～9,999羽	1万～29,999羽	3万～49,999羽	5万～99,999羽	10万～499,999羽	50万～999,999羽	100万羽以上
戸数	2,051.5	2,014.9	21.4	8.9	3.3	2.1	0.7	0.1	0.1
割合	100.0%	98.2%	1.0%	0.4%	0.2%	0.1%	0.0%	0.0%	0.0%

資料：中国農業農村部「中国畜牧獣医年鑑」

鶏肉の輸出は鶏肉調製品が中心である。主な輸出相手国は日本（8割）であり、2014年に発覚した消費期限切れ鶏肉の使用問題により、2015年以降の輸出量は減少している。（表15）。

鶏肉の小売価格は、2015年以降、横ばいで推移しており、消費者物価指数が年率1～2%程度で上昇していることを考慮すると、相対的に安価になっている（図16）。

表15 鶏肉需給の推移

（単位：万トン）

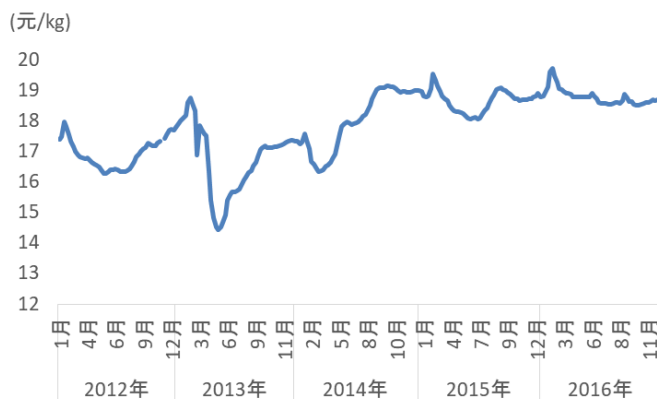
区分／年	2012	2013	2014	2015	2016
生産量	1,370	1,335	1,300	1,340	1,230
輸入量	25.4	24.4	26	26.8	43
輸出量	41.1	42	43	40.1	38.6
消費量	1,354	1,317	1,283	1,327	1,234

資料：USDA/FAS「PSD Online」

注1：輸入量および輸出量には、鶏肉調製品を含む。

2：重量は調理用換算（Ready to Cook Equivalent）、もみじ（鶏足）を除く。

図16 鶏肉（丸どり）の卸売価格の推移



資料：中国農業部「中国農業発展報告」



写真7 済南市内の市場での丸どり販売風景



写真8 済南市内の市場での生鳥販売風景

(4) 飼料穀物

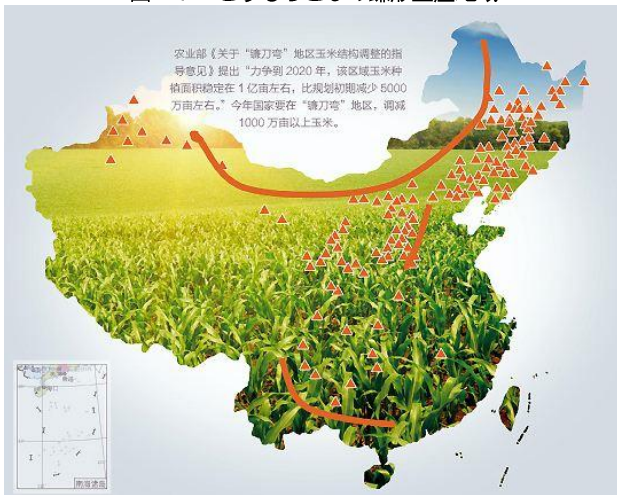
中国はトウモロコシを重要な作物と位置付け、需給の安定を図るため、穀物備蓄政策を実施してきた。しかし、近年、最低買付価格を保証する備蓄政策の実施や、トウモロコシやその代替作物であるコウリヤンの内外価格差などにより、在庫が積み上がっていたため、政府は2016年から他作物への作付け転換を促すとともに、同年4月にとうもろこしの政府による最低保証価格を廃止し、市場買付けに移行した。

トウモロコシの国内生産量は、2016年以降、減少傾向で推移している。一方で、消費量は飼料向けと工業向けが増加し続けている（表16）。なお、生産量

を地域別に見ると、東北3省（黒竜江、吉林、遼寧）で全体の3割、さらに内モンゴル、河北、河南、山東、山西を加えると7割を占める（図17）。

中国では、大豆を大量に輸入し、搾油後、大豆油かすが家畜飼料の原料として使われている。2016年の大豆輸入量は8391万トンであった。

図17 トウモロコシの鎌形生産地域



資料：農業農村部

注：トウモロコシの生産が多い地域が鎌状に分布していることから、鎌形生産地域と呼ばれる。

表16 トウモロコシ需給の推移

年度	2014/15	2015/16	2016/17	2017/18	2018/19
作付面積(万ha)	3,730	3,846	3,602	3,373	3,475
総供給量(万吨)	22,531	23,694	20,893	20,615	20,524
国内生産量	21,976	23,377	21,969	20,265	20,174
輸入量	555	317	246	350	350
総需要量(万吨)	16,001	16,635	19,388	21,260	21,880
国内消費量	16,000	16,635	19,380	21,250	21,870
飼料向け	9,750	10,050	11,620	13,100	13,300
工業向け	4,800	5,200	5,850	6,650	7,000
種・食用向け	1,240	1,230	1,210	1,200	1,220
貯蔵・加工時損耗	210	155	700	300	350
輸出量	1	0	1	10	10

資料：玉米網

注：2017/18年度、2018/19年度は2018年10月時点の見込み。生産年度は10月～9月。



写真9 天津市に輸入されたアルファルファ

表17 大豆油かす需給の推移

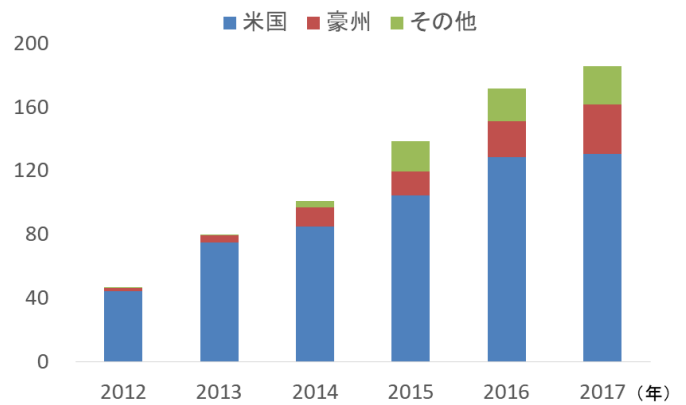
(単位：万吨)

区分/年	2012	2013	2014	2015	2016
生産量	5,144	5,453	5,900	6,455	6,970
輸入量	1.6	2.0	5.8	2.4	6.1
輸出量	137	202	160	191	111
消費量	5,009	5,253	5,747	6,266	6,865

資料：USDA/FAS [PSD Online]

また、乳牛の飼料として、アルファルファの輸入量が急速に増えている(図18)。なお、アルファルファはほとんど乾草であり、ミールやペレット状のものは少ない(写真7)。

図18 アルファルファの輸入量の推移



資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコードは1214。



写真10 山東省に輸入されたアルファルファの輸送風景